# 巻　頭　言

桂木　健次

地球の水系循環が生命を宿り，その頂点にヒト社会が存立しているとしても，ヒトがこの生命系を左右する地球環境に依存しているということはどうしようもない真実なのである．ヒトが営む「エコノミー」という営為もまた，そうしたコスモスの掌中における＜コト＞であることに，やっと我々も気付いてきた．まず，我々は自分の営みを支えてくれる足元の「土」（土壌）や飲み水のことを顧よう．地域の土や水は，我々身自身の身体でもあるのだ．自分の体調をそうした周りの自然との対話によって，毎朝夕確証しなくなったら，我々は自分自身をも見失う．

河北潟湖沼研究所を立ちあげる動機になったのは，そうした我々の中に自然の鼓動の取り戻しをかけた，「淀み濁った（汚染された）潟に健康を取り戻す」想いであった．我々は，何かかっこいいパフォーマンスをするために研究所をつくったのではない．我々自身が健康であり続ける営みの取り戻しをかけたのではなかったか．そして，ささやかな＜コト＞をこの 3 年間継続してやってきた．自分の身体を流れる水を補給したいように，湖畔にたって潟の状態を気遣い，どう自然を取り戻せるかを考え，そこに生息する生き物や微生物や水面を撫でる風物に問いかけてきた．それが，湖沼研究所のやってきたコトのすべてだ．昨年の正月に，突発的に発生したナホトカ号破断事故による流出重油が周りの海に漂着したとき，湖沼研究所のスタッフは河北潟のことを気遣ったが，潟は「周りに目をむけて」と我々に行動を促した．

これからも河北潟湖沼研究所は，つねに自然の鼓動のわかる感性と，それを科学的に析出診断し，適切な処置を講じうる業を育んでいく心ある人々のネットワーク（水脈）でありつづけよう．

（富山大学教授）